

右頸部良性腫瘍

中村 龍介

年月の経つのは実に早い。気がつけば今年は後期高齢者を迎える。加齢とともに身体に色々な異変が生じることは避けられない。

十年以上前、重度の前立腺がんとの診断を受け、目の前が真っ暗になった。が、医師の勧めるホルモン療法が功を奏したのか、その後異常なく経過してきた。

これが「一病息災」というものか、と喜んでいたのだが、白内障をきっかけに上から順にボロが出てきた。

二年前、左眼に霧がかかったように視力が低下、車の運転にも差し支えるようになった。典型的な老人性白内障だ。

眼科専門病院の診察を受けた。
「直ぐに切りましょう」

アラフォーの女医は事もなげに言う。手術で濁った水晶体を吸いだし、人口レンズを挿入するという。十八のとき急性虫垂炎を患って以来の手術だった。幸い、経過も良好で両眼ともよく見えるようになった。

今度は右耳の直ぐ下に小さな吹き出物ができた。気にもせず放っておいたところ、段々大きくなり、サクランボほどになった。しかも、中央には芯がある。コブ取り爺さんになるのも本意なので病院を訪れた。

レントゲンと超音波検査の結果から「右頸部良性腫瘍」との診断が出された。

「腫瘍は良性です。放っておいてもいいが、場所が顔面神経の中枢部に近く、最悪の場合、顔面神経痛を誘発する危険があります。医師としては切除をお勧めします」

担当医は五十過ぎの男性。

「三日間の入院と一週間後の抜糸。以降、二度の事後検査。順調なら一か月後には完治します。傷跡も残りません」

テキパキした診察と歯切れよい口ぶりに納得して、またも、手術を受けることになった。

「案ずるより何とか」で最初の麻酔注射がチクリと来たが、

その後は特に痛みを感じなかった。

メスを入れたな、という感触はあった。やがて、睡眠誘導剤が効いたらしく眠ってしまった。小一時間も経つだろうか。医師に起こされて目を覚ました。

「取れました。これです。」

目の前に切除したばかりの腫瘍の中身が、食塩水（？）を入れたビーカーの中に浮かんでいた。

何と形容すればいいのか。一瞬、キレイだと感じた。よく見ると、バター状の脂肪に包まれた血の塊のような真っ赤な物体が目撃された。受精卵を割った時の光景を想起した。血にまみれた新たな生命が玉子の海を泳いでいる。

術後の経過は極めて順調で、抜糸も問題なく、異変は無事収束した。

次なる問題は歯。毎朝のトーストが噛めないほどに状態はよくない。が、こちらは老化現象だから一挙に改善する道はないだろう。いや、なまじ回復しない方がいいかもしれない。歯より下に新たな異変が起こる方が問題は大きそうだから――。

【二〇一五年二月記

原稿用紙三枚

課題「変」】



Before

After

Now